「編集後記」の前の閑話

この手引の編集は、過去のプログラム・ライブラリ全般の見直しと同時に行なわれました。ライブラリの開発者、移植者に問い合わせ、継続の必要はないと判断されたものは、適宜運用を停止していきました。一時期、センターニュースに「~の運用停止について」の記事が大量に溢れたのをご記憶の方もいらっしゃると思います。その結果、この手引が完成したわけですが、正直発行までこれほどの運用停止を行なうとは考えていませんでした。

運用を停止したライブラリの大半は、数値計算サブルーチンに属します。これらはセンター開設初期の 1970 年代、行列演算や数値微積分等の基本的ライブラリが未整備な時期に登録されたものです。現在は総合的な数値計算パッケージが、安定したサポートを保証しつつ提供されていることから、これら運用停止したライブラリが“役目を終えていた”ことは否定できません。また、商業ベースの充実した専門ソフトの増加は、基本的に個人ベースの開発課題のあり方や、さらに踏み込んで、大型計算機センターの存在意義さえも問い直しています。

運用停止したライブラリの、当時手書きの説明書やソースプログラムを眺めると、センター開設当時の“なんとか計算機環境をより良いものにしよう”という利用者や職員の意気込みがひしひしと伝わってきました。それらの、多分幾日か徹夜しデバッグを重ね、何度も何度もテストを繰り返して完成した苦労の結晶を、当時アルゴリズムの観念すら持っていない単なるその辺(あたり)の子どもだった我々が、今頃になって“役目を終えた”などという偉そうな理由で簡単に「殺して」いくのは、いい気持ちではありません。素直に告白すると、編集作業は(夜中に淋しく“しこしこ”TEX を打っていたこともあって)暗澹としたものでした。表紙の写真は、笑わせようという意図も、もちろんありますが、センター初期の「若い頃の情熱の記憶」であるライブラリを大量に運用停止した「悪いセンター」の隠喩と解釈下さい。その意味で『利用の手引・ライブラリ編(第 2 版)』は、四半世紀の時を経て被害者が加害者に成長した、情けない報告書でもあります。

と、ここまでの沈んだ文章で終るのはまずいので、本当の編集後記で締めたいと思います。

なお、表紙の写真が今後のセンターを暗示しているのでは、というありがちな質問に対しては“ノーコメント”ということで..... （原稿のまとめ役）

本当の編集後記

長らくお待たせいたしました。まさにこの表現が相応しい歳月が経ってしまいましたね。今回の編集作業は、前回の改訂第 2 版の（手書きの）原稿を打ち込むことから始まりました。鬼のように（幻覚を見ながら[1]）かなりの量を打ち込んだはずなのに、暫定版で既にそれらの多くが消えていました。動作チェックなどの過程で振り落とされてしまったからです。永いブランクがあるのだから仕様がないことです。なにせ改訂第 2 版の頃、私は体よりランドセルの方がデカイ小学校 1 年生ですが、今や周りに「まだ嫁に行かないのか？」と個人の人生設計を無視したアドバイス（大きなお世話）をいただくようになってしまいました[2]。早いものです。しみじみ....

などと感傷に浸っている場合ではありません。編集に携わった者のみでなく、ライブラリを作成・提供した方々の多くの報われない苦労の上に、めでたくこのライブラリ編（第 2 版）が完成し、みなさまのお手元に届いたことを素直に喜びたいと思います。

この利用の手引が、“本物の手引き書”として利用者に愛されることを一同願っております。表紙を飾る衝撃的な写真とともに・・・

---

[1] 九州大学大型計算機センター広報, Vol.26, No.6, pp.683 参照

[2] 1994 年 2 月現在．ちなみに上の広報記事とこの編集後記は同一人物の執筆です。さて誰でしょう。